

日本語とタイ語の現場指示

—「コレ」と「annii」の対照的な分析—

Saranya Kongjit

1. はじめに

本研究は、対照研究の立場で実際の会話空間における日本語の「コレ、ソレ、アレ」とタイ語の「annii, annan, annoon, annuun」の現場指示用法の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。研究方法としては、話し手と聞き手と指示対象物の空間上の関係を様々に設定し、話し手である日本人とタイ人の被験者に指示詞を用いて対象物を指示させるという実験を採用した。本論文では、研究目的、実験概要について論じ、実験で得られたデータの一部である「コレ」と「annii」の指示詞用法について、対照的に分析、考察した結果を示す。

2. 研究の対象と方法

以下では、本研究の対象と研究方法について論じる。

2.1. 「コレ、ソレ、アレ」と「annii, annan, annoon, annuun」の対照研究

日本語には話し手と聞き手と対象物の位置関係を指示する機能を持つ「コレ、ソレ、アレ」や「ココ、ソコ、アソコ」などがあり、タイ語にも「annii, annan, annoon, annuun」や「tiinii, tiinan, tiinoon, tiinuun」などがある。本研究では構文的な使い方は考慮せず、これらを「コソア」と「nii, nan, noon, nuun」にまとめて考える¹⁾。その上で、本研究では「コレ、ソレ、アレ」と「annii, annan, annoon, annuun」を例にとり、両言語の指示機能の類似点と相違点を明らかにする。

2.2. 現場指示用法

「コソア」と「nii, nan, noon, nuun」は現場の事物を指示する「現場指示」と談話上の事柄を指示する「文脈指示」に大別できる²⁾。

日本語の「コソア」と「nii, nan, noon, nuun」の類似点と相違点に関する先行研究には、ワーサナー (1995) とソムキャット (1995) があるが、ワーサナー (1995 : p.1) は現場にない物事を指示する指示詞を対象にしており³⁾、ソムキャット (1995 : p.9) は

「文脈指示」を中心に論じ、現場指示については先行研究のまとめにとどめている。そこで、本研究では従来の研究では十分に論じられてこなかったと思われる実際の会話空間にあるものを指示する「現場指示用法」を研究対象とする。

3. 実験概要

本研究では、話し手と聞き手と対象物の空間上の位置関係を設定し、設定したそれぞれの関係において日本人とタイ人の被験者が用いる指示詞用法を観察する実験方法を採用した。この実験は、日本語の現場指示に関する先行研究をもとにしている⁴⁾。以下では実験の目的と具体的な設定について論じる。

3.1. 実験目的

日本語とタイ語は基本的に話し手からの遠近感によって指示詞が使い分けられるという類似点があり、日本語は話し手からの距離に加えて、指示詞対象が話し手の勢力範囲内にあるか話し相手の勢力範囲内にあるかなども考慮して使い分けるが、タイ語の指示詞は相手の存在をまったく考慮に入れないという相違点があると指摘されている（ソムキャット：1995）。しかし、このような心理的な遠近感、あるいは勢力範囲という抽象的な説明は、タイ人学習者にとって理解しにくい（ワーサナー：1995）。

そこで本実験では、実際の会話空間においては各指示詞が具体的にどの対象物を指示し、その対象物を指示する際に話し手と聞き手との位置関係はいかなるものであるかを検証することによって、話し手と聞き手の遠近感と、話し手と聞き手の勢力圏という概念をより明らかにすることを目的とする。

3.2. 状況設定

実験では、実験者が聞き手になり、日本人5人とタイ人5人の被験者が話し手になる。話し手と聞き手の空間上の関係を条件として、16の状況を設定する。番号をふった対象物をランダムに選び、話し手の周囲40の位置に設置する。聞き手は16の状況ごとに設定された位置に移動し、各位置から対象物の位置について番号で質問する。話し手は質問に対して指示詞を用いて答える。以下では実験の設定についての詳細を示す。

3.2.1. 実験場における対象物の位置

図1で示すように、対象物（以下R）は実験場の中心の周囲40の位置に設置した。すなわち、実験場の中心から45度ずつずらして決めた8方向の放射状に中心から1.5メートル単位で5段階の距離を設定した。各放射状は0°、45°、90°、135°、180°、225°、270°、315°と呼び、そして、各放射状の設定した距離を1.5m、3m、4.5m、6m、7.5mと呼ぶ。以上のように設定した合計40の位置に、1から40まで番号をふったRをランダムな順番で設置する⁵⁾。

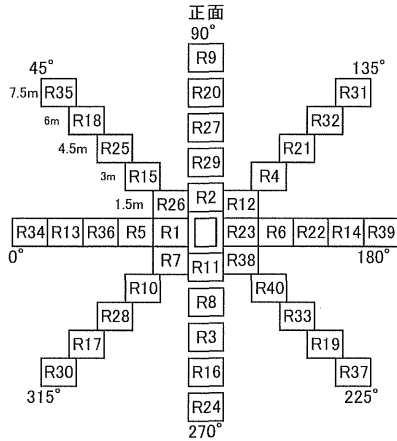


図1 設定した空間における各対象物の位置

3.2.2. 話し手と聞き手の関係

3.2で示した話し手（以下S）と聞き手（以下H）の空間上の関係は、図2と図3で示す通り、SとHの体の向き、方向、距離という条件を様々に組み合わせて得られたものである。これらの関係を「状況」と呼び、16通り設定した。各状況は、Sの位置を変えずにHが様々な場所に移動することによって作られる。詳細を以下に示す。

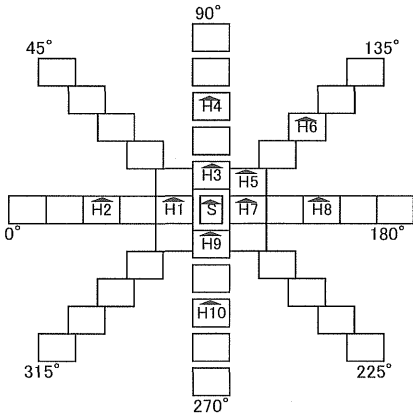


図2 「並」の話し手と聞き手の位置関係

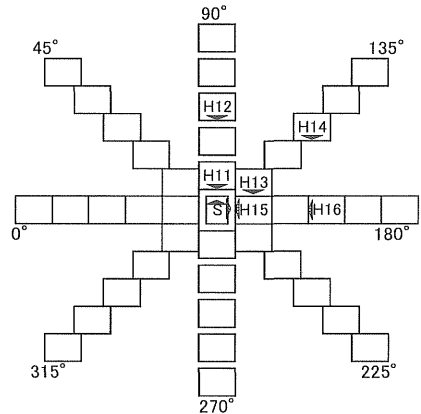


図3 「対」の話し手と聞き手の位置関係

S = SPEAKER (話し手)	H = HEARER (聞き手) ※聞き手の位置と対象物の位置が重なる	▲=話し手と聞き手の向き方
H1、2、3、…、H16 =話し手と聞き手の状況番号 ※SはH1からH14までは90°に向き、H15とH16では180°に向く		

まず、体の向き（以下、SH 向き）については、「並」と「対」の二つの条件を設定した⁶⁾。「並」（図 2）は S と H がともに実験場の正面を向いて会話するという条件で、「対」（図 3）は S と H が向かい合って会話するという条件である。つぎに、H の方向については、「並」では、H が 0°、90°、135°、180°、270° の放射状の線上にいる条件、「対」では H が 90°、135°、180° の放射状の線上にいる条件を設定した。S と H の距離（以下、HS 距離）は、S から 1.5m（H1、H3 等の H 奇数番号）と 4.5m（H2、H4 等の H 偶数番号）の距離に H が座るという条件を設定した。これらの条件の組み合わせから、「並」では 10 状況（H1 から H10）、「対」では 6 状況（H11 から H16）、合計 16 状況を設定した。

3.2.3. 対象物と話し手と聞き手との関係

以上 3.2.1 と 3.2.2 の状況設定によって、各状況では、話し手（S）と対象物（R）の位置を変えずに聞き手（H）が様々な場所に移動することになる。また、対象物（R）は話し手（S）と聞き手（H）の周囲に設定され、それらの位置関係は三角形に設定された。そのため、各対象物については 3.2.1 で設定した各対象物の放射線上の位置（R 角度）、対象物と話し手との距離（RS 距離）、方向（RS 前後）と、3.2.2 で設定した話し手と聞き手との体の向き（SH 向き）、話し手と聞き手との距離（SH 距離）以外に、三角法⁷⁾によって各対象物と聞き手との距離（RH 距離）と方向（RH 前後⁸⁾）を求めることができる。それぞれの対象物をもつ話し手と聞き手との位置関係に関するこれらの情報を、本実験では、各対象物の特徴とみなす。

3.2.4. 会話の設定

実験では著者が実験者になり、日本人 5 人とタイ人 5 人が被験者になる。被験者が話し手（S）として実験空間の中心に座り、実験者は聞き手（H）として、状況ごとに設置した位置に座る。実験者と被験者は一対一で以下の問答をする。

実験者（H）：「××番のコップはどれですか。」 / 「keaw mai leek ×× annai」

被験者（S）：「コレ、ソレ、アレ」 / 「annii, annan, annoon, annuun」

実験者は質問文の「××」にコップの番号を入れて質問し、日本人の被験者は「コレ、ソレ、アレ」のいずれか一つを選び、タイ人の被験者は「annii, annan, annoon, annuun」のどれか一つを選んで答える。

一人の被験者が一つの状況で 40 位置すべての対象物についての問答を終えた後、次の被験者が話し手になり、同様の問答を行う。全被験者が 40 位置についての問答を 16 状況すべてにおいて終えるまで実験を繰り返す。

4. 結果分析

上述の実験設定によって、対象物と話し手と聞き手との様々な位置関係（距離・方向）が作り出された。実験では、これらの位置関係をもつ対象物について、日本人 5 人の

「コレ、ソレ、アレ」とタイ人5人の「annii, annan, annoon, annuun」の指示詞用法のデータを得たが、本論ではページ数の都合により「コレ（以下「コ」）」と「annii（以下「i」）」を対照的に分析した結果のみを示す。

分析は以下の手順で行う。まず、5人の被験者が同じ指示詞を用いる対象物を取り上げて、それらの対象物と話し手および聞き手との関係について、3.2.3で述べた特徴に着目して考察する。すなわち、被験者5人全員が「コ」あるいは「i」を用いる場合（使用人数5人）と、一人も「コ」ないし「i」を用いない場合（使用人数0人）の対象物を取りあげ、それらに共通する特徴を探る。「コ」と「i」の使用条件と不使用条件について、使用人数5人の対象物に共通する特徴を各指示詞の使用条件、使用人数0人の対象物に共通する特徴を各指示詞の不使用条件とみなす。次に、以上で得られた各指示詞の使用条件と不使用条件確認するために、使用人数が5人および0人の場合と同じ特徴を持つ対象物について「コ」と「i」の使用を観察する。さらに、「コ」と「i」の使用人数が5人以下である対象物の特徴についても考察する。最後に、日本語とタイ語の現場指示用法の類似点と相違点について検討する。

4.1. 「コ」の用法

使用人数5人ないし0人で「コ」が用いられる対象物の位置は、状況によって異なる。40位置の対象物の中で日本人の被験者5人全員が「コ」を用いた対象物はR1、R2、R7、R11、R12、R23、R26、R38の8位置にある。一人の被験者も「コ」を用いない対象物はR3、R6、R9、R13、R14、R16、R19、R21、R24、R28、R30、R31、R32、R33、R34、R35、R36、R37の18位置にある。これらの対象物の実験場における位置は図4で示すとおりである。

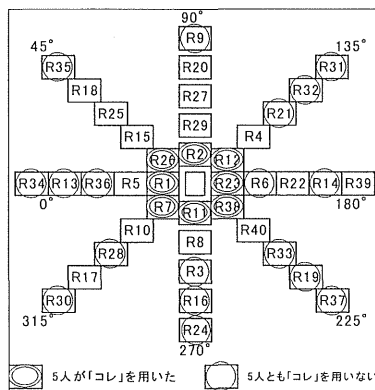


図4 「コ」が5人と0人で用いられる対象物の位置

以下では、これらの対象物の特徴を観察した結果を示す。

4.1.1. 「コ」の使用人数が5人の対象物の特徴

5人全員が「コ」を用いたR1、R2、R7、R11、R12、R23、R26、R38は、表1で示すような特徴を持つ。

表1 5人が「コ」で指示された対象物の特徴

	R 角度 (°)	RS 距離 (m)	RS 前後	RH 距離 (m)	RH 前後
R1	0	1.5	前、後	0 ~ 6	前、後、H
R2	90	1.5	前	0 ~ 6	前、後、H
R7	315	1.5	後、前	1.15 ~ 6	前、後
R11	270	1.5	後、前	0 ~ 6	後、前、H
R12	135	1.5	前	0 ~ 5.66	前、後、H
R23	180	1.5	前	0 ~ 6	前、後、H
R26	45	1.5	前、後	1.15 ~ 5.66	前、後
R38	225	1.5	後、前	1.15 ~ 5.66	前、後

実験では対象物を、RS 距離 1.5m から 7.5m の間で、RH 距離 0m から 12m の間に設置した。日本人の被験者 5 人全員が「コ」を用いた対象物のすべてが RS1.5m の位置にあった。1.5m は、設定した RS 距離の中で最短距離である。しかも、それらは設定した 8 の R 角度での RS 距離 1.5m、つまり、話し手の前後の RS 距離 1.5m にあるすべての対象物だった。状況によって聞き手の位置が変わるために、これらの対象物の聞き手との距離 (RH 距離) と方向 (RH 前後) は様々である。これらの対象物は聞き手の周りにあり、RH 距離の範囲は聞き手の位置と重なる RH 距離 0m から、最長の RH 距離として設定した 12m の半分にあたる 6m までである。

4.1.2. 状況別で見た RS 距離 1.5m での「コ」の使用人数

表2は、4.1.1で取り上げた対象物についての各状況における「コ」の使用人数(0、1、2、3、4、5人)をまとめたものである。

表2 状況別で見た RS 距離 1.5m の対象物における「コ」の使用人数

	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
R1	1	5	5	5	5	5	4	5	4	5	5	5	5	5	3	4
R2	3	5	4	5	4	5	5	5	5	5	1	5	4	5	5	4
R7	2	3	4	4	4	4	3	4	2	4	5	5	3	4	3	2
R11	3	4	4	4	3	4	3	4	0	2	4	4	3	4	5	5
R12	5	5	2	5	1	5	3	5	5	5	5	5	1	5	4	5
R23	5	5	4	5	2	5	1	5	4	5	5	5	2	5	4	5
R26	4	5	4	5	5	4	5	5	4	5	5	4	5	5	5	5
R38	3	3	4	4	4	4	3	4	2	4	3	4	3	3	3	5

状況が変わることによって聞き手が移動した場合、「コ」の使用人数がどう変わるかを観察すると、表2にある通り、RS距離1.5mの対象物は、状況によって「コ」の使用人数が変わる。R26のように、どの状況においても「コ」の使用人数が半分以上（3人以上）の対象物もあれば、R1のようにH1以外には使用人数が3人以上であるが、H1では使用人数が1人になる対象物もある。また、R11のように、H9では「コ」の使用人数が0人となり、他の状況では5人とも「コ」が用いる対象物もある。

表3では、「コ」の使用人数が変わったことと聞き手の移動したことの関係を明らかにするために、RS距離1.5mで「コ」の使用人数が少ない対象物の持つ特徴について観察する。

表3 RS距離1.5mで「コ」の使用人数が二人以下の対象物

	状 況	SH向き	HS距離 (m)	R角度 (°)	RS距離 (m)	RS前後	RH距離 (m)	RH前後	コ (人)
R1	H1	並	1.5	0	1.5	前	0.00	H	1
R2	H11	対	1.5	90	1.5	前	0.00	H	1
R7	H1	並	1.5	315	1.5	後	1.15	後	2
R7	H9	並	1.5	315	1.5	後	1.15	前	2
R7	H16	対	4.5	315	1.5	後	5.66	前	2
R11	H9	並	1.5	270	1.5	後	0.00	H	0
R11	H10	並	4.5	270	1.5	後	3.00	前	2
R12	H3	並	1.5	135	1.5	前	1.15	後	2
R12	H5	並	1.5	135	1.5	前	0.00	H	1
R12	H13	対	1.5	135	1.5	前	0.00	H	1
R23	H5	並	1.5	180	1.5	前	1.15	後	2
R23	H7	並	1.5	180	1.5	前	0.00	H	1
R23	H13	対	1.5	180	1.5	前	1.15	前	2
R38	H9	並	1.5	225	1.5	後	1.15	前	2

「コ」の使用人数が少ない対象物の中で、使用人数が0人あるいは1人となるのは、RH距離0mつまり聞き手の位置と重なる対象物である。それらの対象物のうちで「コ」の使用人数が0人となるのはH9でのR11である。RS距離が1.5mでRH距離が0mとなる対象物は、H9でのR11の他に、H1でのR1、H11でのR2、H5でのR12、H13でのR12、H7でのR23がある。それらも「コ」の使用人数が1人で、聞き手の位置と重ならない対象物と比べて、「コ」の使用人数が少ない。

このように、RS距離が1.5m（実験場において最短距離にある）のうち、RH距離0mで聞き手の位置にある対象物では、聞き手と重ならない位置にある対象物と比べて、多くの場合「コ」の使用人数が少ない。しかし、聞き手と重なる位置にありRS距離が短い対象物は「コ」の使用人数が少ないとは必ずしもいえない。表4で示すように、H3でのR2とH15でのR23は、RS距離が1.5mで聞き手と重なる位置にあるが「コ」の使用

人数が多い。

表4 RS距離 1.5m で聞き手の位置と重なる対象物での「コ」の使用人数

	状 況	RS距離 (m)	RS 前後	RH 距離 (m)	RH 前後	コ (人)
R2	H3	1.5	前	0	H	4
R23	H15	1.5	前	0	H	4

しかし、聞き手の位置に重なる対象物の多くは「コ」の使用人数が少ないことと、同じ位置にある対象物は「コ」の使用人数が多いが、聞き手と重なる位置になる状況のみでは「コ」の使用人数が少ないことから、日本語の「コ」はRS距離とともにRH距離も同時に考慮に入れて決定されると考えられる。

以下では、一人も「コ」を用いない対象物について論じる。

4.1.3. 「コ」が用いられない対象物の特徴

一人の被験者も「コ」を用いない対象物の特徴は表5で示すとおりである。

表5 「コ」が用いられない対象物の特徴

	R 角度 (°)	RS 距離 (m)	RS 前後	RH 距離 (m)	RH 前後
R3	270	4.5	後、前	0 ~ 9	後、前、H
R6	180	3	前	1.5 ~ 7.5	前、後
R9	90	7.5	前	3 ~ 12	前、後
R13	0	6	前、後	1.5 ~ 10.5	前、後
R14	180	6	前	1.5 ~ 10.5	前、後
R16	270	6	後、前	1.5 ~ 10.5	後、前
R19	225	6	後、前	4.25 ~ 9.72	後、前
R21	135	4.5	前	0 ~ 8.31	前、後、H
R24	270	7.5	後、前	3 ~ 12	後、前
R28	315	4.5	後	3.44 ~ 9	後、前
R30	315	7.5	後	5.36 ~ 12	後、前
R31	135	7.5	前	3 ~ 11.15	前、後
R32	135	6	前	1.5 ~ 9.72	前、後
R33	225	4.5	後、前	3.44 ~ 8.31	後、前
R34	0	7.5	前、後	3 ~ 12	前、後
R35	45	7.5	前、後	5.36 ~ 11.15	前、後
R36	0	4.5	前、後	0 ~ 9	前、後、H
R37	225	7.5	後、前	5.36 ~ 11.15	後、前

一人の被験者も「コ」を用いない対象物はR3、R6、R9、R13、R14、R16、R19、R21、R24、R28、R30、R31、R32、R33、R34、R35、R36、R37である。これらはRS距離が

1.5m 以上で、RH 距離が 0m から 12m までである。これらの対象物の話し手と聞き手の方向関係は様々で、話し手の前後、聞き手の位置、聞き手の前後にある。RH 距離の範囲と RS 距離は、全員が「コ」を用いて指示した対象物と比べて長い。

4.1.1 から 4.1.3 までを見ると、RS 距離 1.5m 以外では、「コ」が用いられないように思われる。このことを検証するために、4.1.4 では RS 距離が 1.5m 以外の対象物について「コ」の使用人数を確認する。

4.1.4. RS 距離 1.5m 以外の対象物における「コ」の使用人数

各 RS 距離における「コ」の使用人数は表 6 に示すとおりである。「コ」は RS 距離 1.5m の対象物にも、RS 距離 3m から 7.5m の対象物にも用いられる。RS 距離 1.5m では「コ」の使用人数が 3 人以上となる対象物の個数が多い。RS 距離が 1.5m 以外では「コ」の使用人数が 3 人以上となる対象物の個数が少なく、「コ」の使用人数が 0 人となる対象物の個数が多い。

表 6 「コ」の使用人数と RS 距離を同時にみた対象物の個数

RS 距離	「コ」の使用人数					
	0 人	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人
1.5m	1	5	8	18	38	58
3m	109	15	4	0	0	0
4.5m	124	4	0	0	0	0
6m	121	2	4	1	0	0
7.5m	127	1	0	0	0	0

4.1.5. まとめ

以上で示したように、全員が「コ」を用いて指示した対象物は RS 距離が 1.5m という共通点を持つ (表 1)。RS 距離 1.5m に設置した対象物のなかには、聞き手の位置と重なるものもある (表 2)。そうした対象物では、多くの場合、聞き手の位置と重ならない対象物と比べて「コ」の使用人数が少ない (表 3、表 4)。つまり、RS 距離より RH 距離の方が短い対象物では「コ」の使用人数が減少することになる。「コ」は RS 距離が 1.5m 以外の対象物にも用いられるが、その使用人数は被験者の半数に満たない (表 6)。「コ」の使用人数が被験者の半数以上である対象物の特徴を「コ」の使用条件とみなすと、「コ」の使用は以下の条件によって決められると考えられる。

条件 [1]: その対象物は会話空間において話し手から最も短い距離にある

条件 [2]: その対象物の話し手からの距離は聞き手からの距離より短い

4.2. 「i」の用法

タイ人の被験者 5 人全員が「i」を用いた対象物は R1、R2、R7、R11、R12、R23、R38

の7位置にあり、聞き手の位置が変わっても一人も「i」を用いない対象物は R14、R16、R18、R19、R20、R24、R27、R28、R30、R31、R32、R34、R35、R37、R39 の15位置にある。これらは図5で示すような空間上の位置にある。

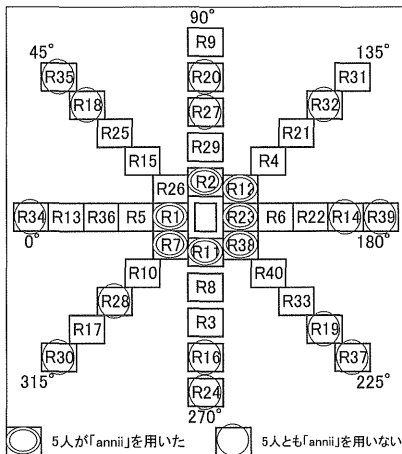


図5 「i」が5人と0人で用いられた対象物の位置

4.2.1. 「i」の使用人数が5人の対象物の特徴

5人全員が「i」を用いた対象物は、R1、R2、R7、R11、R12、R23、R38である。これらは、4.1.1で論じた全員が「コ」を用いた対象物と一部一致する。これらの対象物の聞き手との距離と方向関係は4.1.1の表1に示したとおりである。すなわち、本実験で最短のRS距離として設定したRS距離1.5mにある。状況ごとに聞き手の位置が変わるために、対象物と聞き手との距離（RH距離）と方向（RH前後）は様々である。また、対象物と聞き手との距離は0m（聞き手と重なる位置）から6m（設定したRH距離の最長距離12mの半分）までの範囲にある。合計8位置あるRS距離1.5mの対象物のうちR26は、どの状況においても「i」の使用人数が3人以上であるものの5人にはならない。

以下では「i」の使用人数と聞き手の位置の関連性について観察する。

4.2.2. 状況別で見たRS距離1.5mでの「i」の使用人数

表7では、RS距離1.5mの対象物についての「i」の使用人数を聞き手の位置ごとに示した。その結果、RS距離1.5mでは、聞き手の位置によって「i」の使用人数が変わる。R11とR23とR26のように聞き手がどこにいても「i」の使用人数が3人以上の対象物と、R1、R2、R7、R12のように聞き手の位置によっては「i」の使用人数が3人以下になる対象物に分けられる。

表7 状況別で見たRS距離1.5mの対象物における「i」の使用人数

	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
R1	1	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
R11	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	4	5	5
R12	5	5	5	5	3	5	5	5	5	5	5	5	1	4	5	5
R2	1	5	4	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	5	5	5
R23	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
R26	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3
R38	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5
R7	1	4	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5

RS距離1.5mでは、聞き手の位置によって「i」の使用人数が変わる。R11とR23とR26のように聞き手がどこにいても「i」の使用人数が3人以上の対象物と、R1、R2、R7、R12のように聞き手の位置によっては「i」の使用人数が3人以下になる対象物に分けられる。

表8では、「i」の使用人数が3人以下である対象物について、対象物と話し手および聞き手との関係をまとめて示す。

表8 RS距離1.5mで「i」の使用人数が3人以下の対象物

	状況	RS距離 (m)	RS前後	RH距離 (m)	RH前後	i (人)
R1	H1	1.5	前	0.00	H	1
R2	H1	1.5	前	2.12	前	1
R7	H1	1.5	後	1.15	後	1
R12	H13	1.5	前	0.00	H	1

ここで、「i」の使用人数が特に少ない対象物は聞き手(H)の位置と重なるものもあれば、重ならないものもあることがわかった。

表9 RS距離1.5mで聞き手の位置と重なる対象物での「i」の使用人数

	状況	RS距離 (m)	RS前後	RH距離 (m)	RH前後	i (人)
R2	H3	1.5	前	0	H	4
R2	H11	1.5	前	0	H	3
R11	H9	1.5	後	0	H	4
R12	H5	1.5	前	0	H	3
R23	H7	1.5	前	0	H	4
R23	H15	1.5	前	0	H	5

「i」の指示用法と聞き手(H)の位置との関係を見るために、RS距離1.5mでHの位置に重なる他の対象物についての「i」の使用人数を表9で確認した。その結果、聞き手

の位置と重なる対象物では「i」の使用人数が3人以上であることが分かった。以上見たように、RS距離1.5mで聞き手の位置にある対象物の中には、「i」の使用人数が3人以下のもの（表8）もあるが多くの場合には「i」の使用人数が3人以上（表9）である。

このように、RH距離やRH前後は多様であるのに対して、RS距離1.5mである時には16状況のうち15状況において「i」の使用人数が3人以上となる。このことから、「i」の使用は聞き手との関係よりもRS距離によって決定され则认为られる。

4.2.3. 「i」が用いられない対象物の特徴

どの状況においても一人の被験者も「i」を用いない対象物を表10で示す。これらの対象物には、RS距離が3m以上で、RH距離0mから12mまでのすべての段階にあるという共通点が見られる。これらの対象物と話し手および聞き手との方向関係は様々で、話し手の前後、聞き手の位置、聞き手の前後にある。RS距離とRH距離の範囲は、全員が「i」を用いて指示した対象物と比べて長い。

表10 「i」が用いられない対象物の特徴

	R角度 (°)	RS距離 (m)	RS前後	RH距離 (m)	RH前後
14	180	6	前	1.5 ~ 10.5	前、後
16	270	6	後、前	1.5 ~ 10.5	後、前
18	45	6	前、後	4.25 ~ 9.72	前、後
19	225	6	後、前	4.25 ~ 9.72	後、前
20	90	6	前	1.5 ~ 10.5	前、後
24	270	7.5	後、前	3 ~ 12	後、前
27	90	4.5	前	0 ~ 9	前、後、H
28	315	4.5	後	3.44 ~ 9	後、前
30	315	7.5	後	5.36 ~ 12	後、前
31	135	7.5	前	3 ~ 11.15	前、後
32	135	6	前	1.5 ~ 9.72	前、後
34	0	7.5	前、後	3 ~ 12	前、後
35	45	7.5	前、後	5.36 ~ 11.15	前、後
37	225	7.5	後、前	5.36 ~ 11.15	後、前
39	180	7.5	前	3 ~ 12	前、後

4.2.1 から 4.2.3 まで見た結果、RS距離1.5m以外では5人全員が「i」を用いることはないが、「i」が全く用いられないのはRS距離3m以上の対象物に限られることが分かった。つまり、「i」はRS距離3mでも用いられる。4.2.4ではRS距離別で「i」の使用人数を観察する。

4.2.4. RS距離別にみた「i」の使用人数

「i」はRS距離1.5mと3m以外の対象物にも用いられる。「i」の使用人数が最も多い

のは RS 距離が 1.5m であり、RS 距離の中で「i」の使用人数が多いのは RS 距離 1.5m である。RS 距離 1.5m 以外では「i」の使用人数が 3 人以下まで減少する。使用人数が最も少ないのは RS 距離 7.5m である。各 RS 距離における「i」の使用人数は、表 11 に示すとおりである。

表 11 「i」の使用人数と RS 距離を同時にみた対象物の個数

RS 距離	「i」の使用人数					
	0 人	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人
1.5m	0	4	0	18	10	96
3m	64	50	13	1	0	0
4.5m	120	7	0	0	1	0
6m	118	0	2	1	7	0
7.5m	127	0	0	1	0	0

4.2.5. まとめ

以上で示したように、全員が「i」を用いて指示した対象物は RS 距離 1.5m という共通を持つ（表 7）。RS 距離 1.5m の対象物の中には、聞き手の位置に重なるものもあるが、聞き手の位置に重なる対象物を他の対象物と比べても「i」の使用人数に大きな違いはない（表 8、表 9）。「i」は RS 距離が 1.5m 以外の対象物にも用いられるが、それらの使用人数は 3 人以下である（表 11）。「i」の使用人数が 3 人以上である対象物の特徴を「i」の使用条件とみなした場合、「i」の使用は以下の条件によって決まると考えられる。

条件 [1]：その対象物は会話空間において話し手から最短距離にある

5. 「コ」と「i」の対照的分析

日本語の「コ」とタイ語の「i」の類似点と相違点を明らかにする糸口として、本論では使用人数が 5 人と 0 人の対象物を取り上げて対照的な分析を行う。

5.1.1. 「コ」と「i」によって指示される対照物

日本人の被験者が「コ」を用い、タイ人の被験者が「i」を用いて指示する対象物を重ねてみると、「コ」と「i」が同じ対象物を指示していることが分かる。

「コ」と「i」の両指示詞が被験者 5 人全員によって使用された対象物は R1、R2、R7、R11、R12、R23、R38 である。これらの対象物は RS 距離が 1.5m という類似点を持つ。そして、「コ」と「i」の使用人数が RS 距離が増えるにつれて減少するという類似点もある（4.1.4 と 4.2.4）。このことから、「コ」と「i」は話し手から最短距離にある対象物を指示するという同様の機能を持つと考えられる。

相違点としては以下があげられる。すなわち、「コ」が聞き手の位置と重なる対象物では「コ」の使用人数が少なくなる（4.1.5）が、「i」は聞き手の位置に重なる対象物でも

使用人数が多い (4.2.5)。つまり、「コ」は話し手との関係に加えて、聞き手との関係も考慮して使用されるが、「i」は聞き手との関係を考慮せず、話し手との関係によって使用されるという相違点である。

5.1.2. 「コ」と「i」が指示できない対象物

「コ」と「i」が一人の被験者にも用いられない対象物の位置をみると、「コ」と「i」では、それらの位置が重なる部分と重ならない部分があることが分かる。重なる部分にある対象物は R14、R16、R19、R24、R28、R30、R31、R32、R34、R35、R37 である。これらには RS 距離が 4.5m 以上という共通点がある。しかし、「コ」が使用されなくなるのは RS 距離 3m からであり、「i」が使用されなくなるのは RS 距離 4.5m からである。「コ」の使用と不使用を分ける境界は RS 距離 1.5m にあり、「i」の使用と不使用を分ける境界線は RS 距離 1.5m と RS 距離 4.5m の間にあると考えられる。「コ」と「i」の相違点は、この不使用条件を決める境界とそれによって決まる不使用の範囲にある。

この不使用の境界と範囲が指示詞用法において果たす役割に関しては、他の指示詞の使用条件と不使用条件と比較して検討することを今後の課題とする。

5.1.3. まとめ

以上の 5.1.1 で述べたように、日本語の「コ」とタイ語の「i」の類似点は、「コ」と「i」は多くの場合、話し手から最短距離にある対象物を指示する機能を持つという点にある。相違点は、使用において対象物と聞き手の位置関係も考慮に入れるかどうかという点にある。すなわち、日本人が「コ」の使用を決定する際には対象物と話し手との関係と同様に聞き手との関係を考慮するが (4.1.2)、タイ人が「i」の使用を決定する際には聞き手との関係より話し手との関係を優先的に考慮するという点である (4.2.2)。

6. 結論と今後の課題

実験では実際の会話空間における指示詞の用法を観察した。そこで、日本語の「コレ」とタイ語の「annii」は話し手の周りの空間に置かれた対象物をどのように指示し、その対象物はどのような話し手および聞き手との位置関係を持つかを具体的に示した。

本実験で設定した会話空間においては、「コレ」も「annii」も RS 距離 1.5m の対象物を指示した。RS 距離とは、大人の人間が手を伸ばして簡単に接触できる範囲である。先行研究で論じられたように「annii」と「コレ」は話し手に近い距離にある対象物を指示するとすれば、話し手に近い距離とは、本実験においては「設置した会話空間において話し手から最も短い距離」であり「話し手が手を伸ばして簡単に接触できる範囲内」に相当する。

しかし、「コレ」は RS 距離 1.5m でも聞き手の位置に重なる対象物は指示しないことが多い、ということが観察された。聞き手の位置に重なる時、RH 距離が 0m になり、RS

距離よりも短くなる。話し手が手を伸ばして簡単に接触できる範囲にある対象物であるが、RS 距離より RH 距離の方が短いため、聞き手の方が話し手よりも容易に対象物に接触できる。このように対象物が聞き手のほうが話し手よりも容易に接触できる範囲にある対象物には「コレ」が用いられにくい。つまり、「コレ」の使用は、話し手と聞き手の対象物からの距離を比較して決定される。先行研究のように「コレ」は話し手の勢力圏にある対象物を指示するとすれば、その勢力圏は話し手が手を伸ばして接触できる範囲に該当するが、その範囲に聞き手がいない場合に限定されると考えられる。一方、「annii」の使用にはこのような限定はない。

本実験における空間設定で得られた結果では「コレ」と「annii」が指示する対象物は、本実験では RS 距離 1.5m に該当し、「話し手が手を伸ばして簡単に接触できる範囲内」とまとめた。ただし、「コレ」が指示できる範囲は聞き手の位置に邪魔されることがわかった。「annii」の使用は聞き手の位置との関わりが「コレ」ほどはっきりわからない。これは「コレ」と「annii」が用いられる「会話空間において話し手から最も短い距離」は、絶対的なものではなく相対的なものだと考えられる。

本論では「コレ」と「annii」の指示用法と聞き手の位置との関係を中心に分析した。今後の課題としては、「ソレ」、「アレ」、「annan」、「annoon」、「annuun」の指示用法とそれらの対立関係についての分析が残されている。

注

- 1) タイ語の指示詞は Bandhumetha (1982) によって「nii, nan, noon」にまとめるが、Dhanvarjor (1973)、Panupong (1981)、Pankhuenkhat(1998) によると、実際の会話にも「nuun」という言語形式がある。本研究では実際の会話空間における指示詞用法を中心に分析する目的であるため、タイ語の指示詞は「nii, nan, noon, nuun」4 項あると考える。
- 2) 迫田 (1998 : p.56) では「コソア」の用法の名称は研究者によって異なるが、用法自体の違いはあまりないと論じ、対象物は現場の事物を直接に指示する用法であるかないかによって分類できると述べた。本研究は指示詞用法の分類が目的ではないため、迫田 (1998) にしたがって「nii, nan, noon, nuun」も同様に分類できると考える。
- 3) ワーサナー (1995 : p.5) は現場にない事物を指示する用法をまとめて「非現場指示」と呼ぶ。迫田 (1998) の「文脈指示」と相当すると考えられる。
- 4) 話し手と聞き手と対象物の位置を設定した実験的な方法を用いて現場指示用法を明らかにしようとした先行研究は、今井 (1979)、高橋・鈴木 (1982)、遠藤 (1988)、遠藤 (1989) などがある。
- 5) 遠藤 (1989) では対象物を話し手の周りの 25 位置に置いた。話し手の後にある対象物については考察されたが、聞き手の後の対象物についてはまだ十分に考察されていない。本実験では遠藤 (1988) の設定方法を踏まえて、聞き手の後にある対象も考察できるように、対象物の位置を 40 位置に増やした。ただし、実験では被験者の負担にならないように 40 の対象物を 4 回に分けて、1 回に 10 位置を置くことにした。
- 6) 今井 (1979) では各指示詞の指示方は話し手と聞き手の距離と並び方によって異なる述べたが、遠藤 (1989) では話し手と聞き手との並び方に関する要因を実験設定に入れなかった。本実験では今井の結論に基づき、並び方という要因も入れて実験を設定した。
- 7) 一般の三角形の角と辺は三角法の正弦定理と余弦定理によって求められる。本実験における対象物と

話し手と聞き手の位置関係は三角形であるため、対象物と話し手と聞き手の距離と角度については三角法によって求めた。三角法については宮野（1997：p.128）では文科系のために簡単な説明で論じられている。

- 8) 本実験での「RH 前後」と「RS 前後」は、実験開始の時点での聞き手と話し手の体の向きを基準にして前後を決める。すなわち、「H」とは聞き手の位置と重なる対象物である。話し手の「後」とは、H15 と H16 以外は 225° から 315° の範囲内にある対象物で、H15 と H16 の場合は 0°、45°、315° にある対象物で、聞き手の「後」とは、H1、H2、H7、H8 では 225° から 315° の範囲内にある対象物で、H3、H4、H5、H6 では 0°、180° から 315° の間にある対象物と、45°、90°、135° にある対象物で RS 距離は SH 距離より短いあるいは同じ距離の対象物である。H9、H10 では 225° から 315° の範囲内にある対象物で RS 距離が SH 距離より長い対象物などである。

参考文献

- 今井四郎 1979 「指示代名詞の指示機能について」『北海道大学人文科学論集』15 北海道大学文学部
遠藤めぐみ 1988 「指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性と聞き手の非人格化の影響」『The Japanese Journal of Psychology』Vol.59, No.4
遠藤めぐみ 1989 「対話者の操作可能性から見た指示詞ソの使用」『日本教育心理学学会編集』37-1
金水 敏・田窪行則 1992 『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房
阪田雪子 1971 「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21
迫田久美子 1998 『中間言語研究—日本語学習者によるコ・ソ・アの習得—』淡水社
ソムキャット・チャウエンギジワニッシュ 1995 『日本語・タイ語における指示詞と三人称代名詞の研究—書き言葉を中心に—』筑波大学大学院地域研究科平成7年度修士論文
高橋太郎・鈴木美都代 1982 「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3 国立教育研究所報告集 71
堀口和吉 1978 「指示語の表現性」『日本語・日本文化 8』大阪外国語大学
宮野高明 1997 『文科系のための基礎数学』オーム社
ワーサナー・ウィーラパースック 1995 『日・タイ指示詞の対照研究—「コ・ソ・ア」の誤用分析を中心に—』お茶の水女子大学大学院人文科学日本言語文化専攻修士論文
Bandhumedha Navavan 1984 『ไวยากรณ์ไทย (タイ語文法)』Rungruansan Press
Dhanvarjor Ratee 1973 『ลักษณะของคำไวยากรณ์ในภาษาไทย (タイ語の機能語彙の性質)』A thesis for the Degree of Master of Arts Chulalongkorn University

(コンジット サランヤー 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)